【書評】

Margit Bylin-Althin; The Site of Ch'i Chia P'ing 齊家坪 and Lo Hang T'ang (羅漢堂) in Kansu (甘肅) (Stockholm, 1946)

中國史前文化の研究に關する瑞典アンダーソン教授の著書については既に世に知られている所であるが、調査の具體的事實を示す報告書としては一九四三年瑞典東洋美術博物館紀要第十五册がある。これは梅原博士が本誌第三十卷四號に紹介しておられる樣に中間予報的なものであつて、個々の遺跡については、一層詳しい報告の發表が期待されていた次第であつた。かく一九四五・六・七年の同紀要に以下紹介の三つの報告が續々公にされ、こゝに待望の教授の資料がほぼ出揃つて學界に恩惠を與えることになつた。由來中國先史時代遺跡の發掘調査は諸種の理由によつて妨げられ、その地域の廣大なるに拘らず今日なお組織的發掘を經た例に乏しいという實情にあり、ひいて以上の教授の發掘遺物が現在新鮮な第一等資料として重要な位置を占めるのであつて、本報告書を手にするにあたり吾々は前後三十年の長きに亙る博士の遺物の整理に就いての精進に對して敬意を表さねばならない。

さて第一に紹介せんとする margit Bylin-Althin 女史が報告する所の甘肅省寧定縣齊家坪遺跡は、既にアンダーソンの「中華遠古之文化」に於て磨製石斧・石庖丁・粗質灰色繩蓆紋土器等中國先史時代に通有の遺物の他に所謂「カムケラミツク」と呼ばれる一群の土器と、薄手精良にして灰黃色のアンフォーラ狀土器の發見が記載されたものに外ならない。當時博士はこのカムケラミツクに就いて北歐のそれとの類似から兩者の關聯を推測し、アンフォーラ狀器に就いてはその或者に彩紋がある事から他の甘肅彩陶との關係を考えて、編年上最初のものとして、甚だ古い推定實年代を當てたのであつた。その理由とする所は同遺跡では石斧類が多數に出土するにも拘らず金屬器の全く見られぬ事と、仰韶期彩陶が齊家坪遺跡の表面に散布して居るという不充分な層位上の所見にあつた。この事は一九四三年の報告に於ても全く同じ說が力强く繰返されているのである。ところが右の層位關係の不充分に加えて、出土のアンフォーラ式器中に金屬器を摸したと認めらるゝものの存する事から、早く一九二七・八年に實物を一見した我が梅原教授によつて齊家坪を以て甘肅最古の時期とすることへの反對說が公にされて爾來問題となつているものなのである。右の問題に關係した點として本書は包含層の深位から格子紋の彩陶片が出ていて、その他にも十五片の彩陶が發見されており、それらが中期及末期仰韶乃至は朱家寨彩陶と一致する事を明かにして居り、次に伴出の粗質灰色繩蓆紋土器にあつては齊家坪と朱家寨が互に近似しているのを一々圖版によつて說明して兩者が時間的に余り大きな距りのない事。更に購入品であるが胎土、製作等から見て齊家期の物と考えられる器があり、これが

金屬時代に近いものであり、殷銅器との連絡が考えられるとして、遂に安陽に於て金屬術の盛行した時代に、その技術の影響を受けた所の低級文化の所産であろうと論じて、傍證として家畜の種類の豊富なることなどをも擧げているのである。さて報告された右の層位の狀況は從來よりもやゝ詳しい點を知り得たが、何等決定的なものでない事は明かであり、それは單に齊家坪の或時期と仰韶中、末期及朱家寨期とが接觸している事を傍證するに過ぎず、重要な齊家期の開始と仰韶初期との關係は明かにし得ない。從つて齊家坪が甘肅最古の遺跡であるか否かは層位の示す事實からは決し得ない。又次に取上げられた家畜の種類の豊富なる事も資料の乏しい今日果してしかく輕々しく結論を下し得るが否かに疑問がさしはさまれる。してみるとこゝに本書で說かれている齊家期を甘肅先史時代最古のものとする既往の見解に對する新見解の根據はアンフォーラ式器の示す事實を主とするわけである。これについては殷代銅容器との近似は、早く梅原博士の指摘した所であつて、殊に近時殷代銅器の祖型の一部として考えられて來た黑陶と比較すると、酷似するというよりは寧ろ黑陶そのものの一器形であるとも云い得る程である。こゝで最近『中國考古學報』（舊『田野考古報告』）第三册に夏鼐氏が甘肅省半山墓域の魏家咀村陽窪灣の古墓を發掘して齊家期が半山乃至馬廠期よりも新しい事を示す層位的事實を明かにしたことが顧みられるのである。かくて本報告書その他の點から齊家期をもつて甘肅先史時代最古期のものとするアンダーソン博士の假說は調査者の側で撤回されたわけであるが、今後の問題はカムケラミツクと粗質繩蓆紋灰色土器特にそれと河南との關係に在ると言うべきであろうが、右の點でこの報告書の示す事實の記載は新たに重要な意味を持つのである。

次に本報告の後半を占める羅漢堂に就いては既に『黃土地帶』に極めて簡單な記載があり、又一九四三年の報告では、本遺跡出土彩陶文樣中には半山期に盛行した death pattern の初期のものがあり、器形にしても齊家期のものに全く同じものが見られる點から本遺趾の年代を齊家坪に近く仰韶初期に位置するものとの見解が記されている。併し右の諸點は一部首肯される所もあるが、齊家坪出土品に類似するといわれる容器も器形は甚はだ進步したものであつて左程古いものとは考えられないし、彩陶片中（圖版四三）には仰韶期と別個の系統に屬すと思われるものも含んでをり、又その着彩の手法に於ても白色化粧地を用いる點等で寧ろ便化したものと解せられ、ひいてアンダーソン博士の所說に疑問が持たれたのであつた。これが本報告では、先づ彩陶については馬家窯・朱家寨との近似が圖版によつて明確に指摘されて居り、無彩紋土器に就いては小形アンフォーラ形や蓆紋を印する甕、無裝飾の椀等に於て齊家坪に於ける同類との近似がより明確に指摘されて居るのであつた。以上は本書によつて始めて示された事實にして正に重視せらるべきであろう。尤も齊家坪・羅漢堂の遺跡が相近いものである事は早くからアンダーソン博士の主張する所であつて、それに新しい知見を加える所はないわけであるが、齊家坪を先述の如く殷に近いものとすると羅漢堂も當然それに伴つて時代が引下げられねばならないのであつて、此の場合羅漢堂を以て齊家坪に先行する

ものと見る新たな見解が成立つて來るのである。

次に羅漢堂・馬家窯・朱家楽出土土器の近似が、果してその何れを先とし何れを後にすべきかは馬家窯遺跡の詳報を待つて考うべきであると報告者は慎重の態度をとつている。併し現在の資料を以てして果して不可能な事であろうか。こゝに又今後の問題の一つがあるわけである。更に此等の遺跡に見る彩陶と河南仰韶村・秦王楽或は山西西陰村との近似からする甘粛河南兩地域の彩陶群を横に繼ぐ聯繫如何は興味深いものがあるのであつて、それが如何様につながるかという所に大きな問題の一つがある事を此書を讀んで又思い及ぶのである。

最後に報告者は土器片のあるもの（挿圖十一）を以てオルドス青銅器との類似を考え、又羅漢堂出土の石刃を嵌入せる骨鎌をもつて金屬器に祖型を發するものと看做して、オルドス式ナイフをそれに當てているが、如何であろうか。例えば後者にしてもオルドス式ナイフがシベリヤ・蒙古の草原地帯に古くから而も長く行われた事は是認されること乍ら、石刃嵌入の鎌の類に至つてはエヂプト・メソポタミア等の古代東方文明世界により古くから使用されているものである事が此の場合顧みらるべきではなかろうか。

以上本報告に依つて從來説かれて來た齊家期を最古とする誤つた甘粛六期説が發掘者の側から修正せられた事が明かになり、又その記述を通じて從來やゝ關連の薄弱であつた甘粛・河南の兩者の史前文化の横の關係を考える上に豊富な資料を提供した點で注目せらるべきで、中國先史時代今後の研究の新展開に一つの基礎をなす重要なる文献たることは何人にも首肯されるであろう。

——釣田正哉——

J. G. Anderssen: The Site of Chu Chia Chai (朱家楽), Hsi Ning Hsien (西寧縣), Kansu (甘粛). (The Museum of the Far Eastern Antiquities, Stockholm, Bulletin No. 17)

本書はアンダーソン博士が一九二三年十月に發掘した朱家楽遺蹟の正式な報告書である。この遺蹟については、既に「甘粛考古記」「黄土地帯」に於て言及されて居り、又住居址出土の彩陶片については本紀要の第十五卷（一九四三年刊）でやゝ精しく述べられて居る。從つて本書の主とする所は墓址とその出土品、彩陶を除く住居址出土品である。

この遺蹟は、所謂甘粛仰韶期中の最も重要なものとして、長い間その資料の發表が待たれたものであつた。即ち此處に於ては、約五十基にも達する史前墓が組織的に發掘され、又、墓址と住居址とが共に發見されていることが報ぜられた。所が甘粛仰韶期のその他の遺蹟に於ては、組織的に發掘せられた墓は、半山の邊家溝大墓たゞ一基であり、又アンダーソン博士は半山墓地と馬家楽住居址とが同一の住民によつて營まれたもの と論斷して